

289

Berg Balance Scale と日常動作との関連

平田ひとみ¹⁾・横山茂樹²⁾・大城昌平³⁾・鋤崎利貴³⁾

- 1) 介護老人保健施設宝樹苑
- 2) 長崎大学医学部保健学科
- 3) 長崎大学医学部附属病院

key words

Berg Balance Scale ・ Timed up & Go Test ・ 1分間連続起立回数

【目的】

これまで我々は、高齢者を対象としてバランス能力の評価である Berg Balance Scale (以下BBS) と他のバランス機能評価および運動能力との関連について分析した。今回は、高齢者のバランス能力と日常生活活動 (以下ADL) の遂行能力との関連を明らかにするために、BBSと日常生活活動 (以下ADL) および、日常動作 (起立、歩行など) との関連を分析した。

【対象・方法】

施設・老人病院に入所・入院中である70歳以上の者45名 (男性13名、女性32名、平均年齢81.8±5.6歳) であった。抽出条件は、①病態・移動レベルが3ヶ月以上安定し、独歩や歩行補助具を使用し歩行可能な者、②動作時に痛みを有さない者とした。BBSは14項目について検査し、各項目は0から4点の5段階に点数化した (56点満点)。歩行時の動的バランス能力の定量的評価としてTimed up & Go Test (以下TUG) を測定した。TUGは起立、方向転換、3m往復歩行、着座の動作に要した時間 (秒) を測定し、3回の平均値を算出した。下肢筋力、筋持久力、バランス能力の指標として1分間連続起立回数 (以下1mSTD) を測定した。1mSTDは40cmの台からの起立、着座を1動作とした。歩行能力については10m自由・最大歩行速度を測定した。ADL評価はBarthel Index (以下BI) を用いた。統計学的解析の方法は、BBS得点と各測定項目の関連性について、それぞれの変数の分布に応じてPearsonの相関およびSpearmanの順位相関を用いた。BBS得点を目的変数とし、性、年齢、BMIおよびTUG、1mSTD、自由歩行速度、BIを説明変数とした重回帰分析を行った。また、BBS得点を45点以上と未満の2群に分けた場合のTUG、1mSTD、BIの2群間の比較検定 (Mann-WhitneyのU検定、t検定) を行った。

【結果・考察】

BBS得点とTUG、1mSTD、BI、自由歩行速度、最大歩行速度において高い相関を認めた (それぞれ $p<0.01$)。これは重回帰分析の結果も同様に、BBS得点とTUG、1mSTD、自由歩行速度、BIは有意な関連があった (それぞれ $p<0.01$)。BBS得点を45点以上と未満の2群に分けて比較した結果も、高値群で有意にTUGの所要時間が短く、起立回数が多く、BI得点が高かった (それぞれ $p<0.01$)。BBSの各測定項目とTUG、1mSTD、BI、自由・最大歩行速度との関連では、それぞれ「360°方向転換」、「台へのステップ」、「タンデム立位」の項目得点と強い有意な関連があった ($p<0.01$)。

以上の結果からBBSとADLおよび日常動作とは強い関連があると考えられ、BBSは、ADLや日常動作と関連した運動機能評価として有用であると考えられた。

290

臨床実習に対するアンケート調査

大嶽昇弘・大場かおり・堀 信宏・山田みゆき
長田瑞穂・長谷部武久・村井利江

平成医療専門学院

key words

臨床実習・学生・アンケート調査

【はじめに】臨床実習 (以下実習) に対し、学生がどのようなことを目標にし、また実習で何が養われ、何が不十分であったかを知ることは実習指導をする上で有益と考えられる。そこで、今回これらを知る目的で理学療法学科学生 (以下PTS) に対し、アンケート調査を実施した。

【対象及び方法】対象はPTS3年生72名で、これらに対し前期実習終了後、無記名でアンケート用紙を用い調査した。アンケート内容は①医療従事者、理学療法士 (以下PT) を目指す上でどのようなことを目的に、また期待して実習に臨んだか、②実習で苦労したこと、③問題解決の方法、④帰宅後最も時間を費やしたこと、⑤実習で自分が上手くできなかった、不足していると感じたこと (複数回答)、⑥実習で自分が最も成長したと思うこと、以上についてであった。

【結果】アンケートは72名の内46名から回答があり、回収率63.9%であった。①実習に対する目的や期待として、医療従事者を目指すために臨床適応能力を養う39.1% (18名)、患者との接し方を学ぶ30.4% (14名)、医療従事者としての自覚を養う15.2% (7名) などであった。PTを目指すために臨床上的問題解決法32.6% (15名)、理学療法技術30.4% (14名)、基礎知識23.9% (11名) を養うであった。②実習で苦労したことはレポート作成30.4% (14名)、理学療法技術の適用30.4% (14名) であった。③問題解決は教科書利用30.4% (14名)、文献検索30.4% (14名)、実習指導者に相談する28.3% (13名) であった。④帰宅後最も時間を費やしたことはレポート作成54.3% (25名)、デイリーノート記載28.3% (13名) であった。⑤実習で自分が上手くできなかった、不足していると感じたことは基礎知識33名、理学療法技術27名、治療上の問題解決法22名であった。⑥実習で最も成長したと思うことはPTとしての視点を養った、医療従事者としての自覚を養った、患者との接し方を学んだなど各17.4% (8名) であった。

【考察】PTSが実習で苦労したと感じたことは理学療法技術の適用、レポート作成で、帰宅後最も時間を費やしていたのがレポート作成であった。問題解決は多くが教科書、文献で対応し、次に実習指導者に相談することが伺えた。PTSは実習前に臨床実習への期待として臨床適応能力を養う、患者との接し方を学ぶ、臨床上的問題解決法、理学療法技術、基礎知識などを養うことを挙げた。実習で成長した点についてはPTとしての視点、医療従事者としての自覚、患者との接し方が挙げられ、これらはある程度目的が達成できたと思われる。また、PTSは理学療法技術と基礎知識が自分に不足していると感じており、実習を通して理学療法技術適用の難しさを知り、基礎知識の重要性を実感したと思われる。